縁・えん・ふち・へり・縁食・食縁

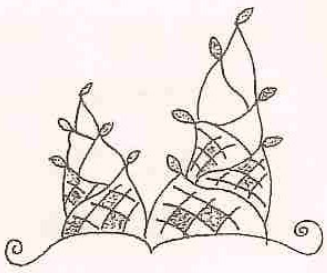
春のえんの庭は、にぎやかです。杏の花、水仙、二輪草、菜の花、チューリップと次々に咲き、筍、山椒の芽が出て、三つ葉が背丈を伸ばし。中でも筍は若竹煮や筍飯になって、えんの配食弁当利用の方々にも届けられます。季節の贈り物です。

そんな年度初めの４月は、さまざま変わり目でもあります。新座市では、介護認定要支援の訪問・通所サービスが、「新座市地域支援総合事業」に変わり、サービスを提供するのがヘルパーさんではなく研修を受けた地域住民になります。えんはこれまでどおり利用する方々が、安心して暮らしていけるよう力を尽くしたいと話し合っています。

次期介護保険改正案の国会審議は、この通信が届く頃には終わっているでしょう。予防とリハビリで「介護を卒業」することが強調され、医療ケアが必要な重度者に重点化する。年収340万円以上ある利用者は3割負担になる。「地域包括ケアシステムの実現」を目指す改定のはずなのに、「在宅で最期まで」実現に必要な在宅介護は薄くなる一方です。超高齢社会日本、これで大丈夫なのでしょうか。

さて、新しい試みが始まります。『だれでも食堂にいざ』です。開始までのいきさつは、3 ページに代表になってくださった斎藤さんが書いてくださいました。これ以上仕事は増やせない、「でもね、やりたいんだな」とひそかに思っていたら、新しい出会いが新しい場を拓いてくれました。

そんな準備のさなかに、このような『子ども食堂』を、「孤食」と「共食」のあいだにある「縁食」と名づけた文章にであいました。筆者は藤原辰史さん（京都大学。農業経済学）。「縁」は「へり」とも「ふち」とも読みますが、「共」よりあっさりした関係。ふらっと立ち寄ってご飯を食べて、ひとときを過ごす。そういう場所なのだと。そこから何か始まるかもしれないし、それだけかもしれない。強制されることなく、誰もが行ってよい場は案外ない。「縁食＝えんしょく」という読みも嬉しい。暮らしネット・えんの「えん」は、縁、円、宴、園、塩…、いろんな漢字に当てられますが、最初に浮かぶのはやはり「縁」です。介護を利用されるのは社会の真ん中ではなく、へり、ふちに生きる方々、「縁（えん）を大切に」という思いがふくらんだ春です。



（代表理事　小島美里）